

明日の滋賀県の市民運動を考える座談会 —せっけん運動を顧みて—



びわ湖大津館（旧琵琶湖ホテル）にて

先号のせっけん運動の特集に引き続き、今号もせっけん運動を特集します。先号では日本石鹸洗剤工業会に取材し、その当時のメーカー側の考え方、その後の商品開発などを聞きました。今号では、この特集を総りあるものとし、将来の滋賀県の環境運動について考えるために、せっけん運動に携わられた世代の次世代の方々を中心にせっけん運動に対する意見や未来への展開等を座談会で伺いました。なおコーディネーターについては、ジャーナリストの大谷昭宏氏にお願いしました。

内なるせっけん運動

大谷 ご自身自身でせっけん運動に関わった方はいらっしやいませんか。奥田さんでしょうか。だいたい1970年代ですよ。奥田さんは70年代生まれですか。
奥田 私は1972年生まれです。もともと出身は大阪ですけれども、田舎のほうで滋賀県の愛東町というところだったのです。その行き帰りの道中のバスで、せっけん使用について、放送が流れていたことをかすかに覚えていたというのがあります。そういう記憶が、どこで仕事をしようかと選ぶ時に、影響が出たのかなというふうに自分ですべて思っています。

大谷 なるほど。黒田さんはどうなんですか。

黒田 私は、言ったら年がばれますが、その頃10歳だったのです。私も田舎が近江八幡のほうで、両親に連れられて琵琶湖に泳ぎに来ていたのですが、汚いからということをやめてしまったのが、すごく残念だったのです。そこから、琵琶湖はなぜ汚いのだろうという思いがありました。ちやうど母親が生協活動をしていましたので、その影響で「合成せっけんを使うのをやめましょう」「みたいな運動が大阪のほうにも波及しました。

大谷 言うなれば、その環境運動というのは琵琶湖と一緒に、大阪のほうまで流れて来た。伊藤さんは学生ですね。生まれているどころか、形にもなっていない頃ですね。

伊藤 1983年生まれです。いま大学で環境科学をやっている、せっけん運動のことというのは、「県の条例を動かした運動」みたいなかたちで教わります。でも、やはり同じ学年の子でもせっけん運動を知らない子はたくさんいました。同じ環境科学部でも。

大谷 「滋賀県立大学生なんだろう」と言っちゃればよかったのに。(笑)「そして、この県にはこんな運動があったんだ」と。伊藤さんはもともと滋賀県のお生まれですか。

伊藤 いや、神奈川県です。

大谷 もともと環境問題に関心があったから滋賀

大谷 昭宏

東京生まれ。読売新聞社で記者として活動したのち、大阪に事務所を設立。テレビ、新聞などで活躍中のジャーナリスト。



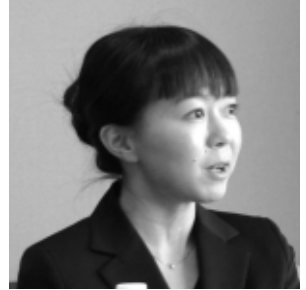
奥田 一臣

大阪生まれ。環境保全に関わる仕事を求めて、滋賀県職員となる。現在、琵琶湖の向こう側に持続可能な社会を見つめようと、調査研究に励んでいる。



中村 知代

金融機関勤務。支店での窓口係の経験を経て、現在は環境を中心としたCSRを推進するセクションに所属し、金融機関の役割の中に、持続可能な社会の構築を見だし、広い視野で日々勉強に励む。



伊藤 真紀

横浜生まれ。滋賀県立大学環境社会計画専攻。滋賀県のせっけん運動をはじめ環境保全に携わる個人のライフスタイルに関心を持つ。



畑 源

草津市生まれ。船大工を業とするかたわら、琵琶湖の環境学習・イベント等を主催し、地元の若手リーダーとして活躍中。



黒田 由美子

大阪生まれ。母親が生協活動をしてきたため、自然に環境問題にふれるようになり、当時のせっけん運動も記憶している。その影響で、現在もなるべく環境にやさしい生活を心がける。仕事をもちながら、子育て・主婦業に奮闘中。



に来たわけですが。伊藤 たぶん、母が生協運動やっていると。やはり今から思えば、滋賀県のせっけん運動から全国に広がることになりすよね。東京のほうにも来て、母親もそういうふうにして、私も小さい頃から、まったく合成洗剤を使うことなく来ています。だから、ある意味そういう環境の世代の、また違った世代なのかと私は思っています。大谷 環境問題が第2世代に入っているというというのはおもしろいですね。畑 僕はたぶんこの頃小学生ですね。中村 私は京都出身で、琵琶湖の水を飲んでいる立場です。就職して初めて滋賀県と縁があって、こちらに来たのです。琵琶湖の恩恵を受けている立場だったのですけれども、自分自身はそのせっけん運動、私は1980年生まれなのですけれども、滋賀県在住の同級生たちが粉せっけんを使っていたという話を聞いて驚いておりまして、どちらかというと他人事のようなことだったのです。

大谷 ということは、むしろ、直接あの時代、あの運動にかかわってきた方というのは、この中にいらつしやらないのですね。私も、もともと東京のほうで生まれたものですから、もうこの時代はもう新聞記者になっていたのですけれども、あまり社会部の記者と環境というのは関係なかった。ただ、武村さんが知事として非常に頑張っておられたというのは新聞記者として知っていましたけれども、直接関わっていませんでした。ただ、すごいなと思うのは、普通、運動というのは3年も経つたら、かすかに知っている人はいるかもしれないけれども、今こうやって運動の時には生まれていないかせいぜい小学生ぐらい。そんな人たちがみんな、「あの運動」として残っているというの、やはりすごいと思うのです。あまりこういう環境運動はないのではないのでしょうか。奥田 そうですね。かなり小さなエリア、一つの身近な河川、水路に近い河川も、ご近所さんでの

活動というような話はいろいろと聞くのですけれども、これだけ時間的にもエリア的にも大きな足跡を残して、なおかつ語り継がれているというのは、あまり僕は聞いたことがないですね。大谷 そうですね。伊藤さんから見ても、市民運動というと、まさに市民であって肩書きがあるわけではない。社会的にその活動が広いわけでもない。それはやはり当時のせっけん工業会というものを相手に、最後は条例までできるようなった。今の世代から見たら相当「すごいな、この運動は」という感じがしません？伊藤 別にこのせっけん運動に限らず、学生運動とか、平和運動とか、そういう関連のその時代、1960年代、1970年代は、その行動力は何なのだろうかと思えます。大谷 そうだよな。それはおじさんたちの時代だから。(笑)学生運動なんか……。伊藤 それは、ある意味幸せです。大谷 それをしゃべり出したら止まらないよ。(笑)

やはり、黒田さんね、そういうパワーというのか、どういふ運動も非常に純粋だった。ただ、「せっけん」というところに私は非常に意味があったと思うのです。

黒田 そうですね。絶対どの家庭でも使う物ですし、それに気をつけるかどうかというだけで運動になってきてしまっているところもあると思うのです。うちの母は、なぜ今でもせっけんを使っているかというところ、合成洗剤を使っているものすごく手荒れをしていたのに、せっけんを使ったら手が荒れなくなりました。彼女自身の体質だけの問題かもしれないのですけれども、結果的にそういうことがあって、いまだに合成洗剤を使わない。

大谷 せっけんというのは、ひとりも残らず全部が使う。私たちは、琵琶湖を汚されて、琵琶湖の水が汚くなって、それでも飲まなければいけない。自分の住んでいる琵琶湖はきれいではない。だから自分たちは被害を受けているのだと思ったら、どっこい、そうではない。「あなたたちのせっけんだよ」と。「ええっ？」と。私たちが加害者だったと。つまり、何が言いたいかというと、伊藤さんの勉強ではないですけれども、環境問題というのは、実は被害者である人たちが加害者になっているのです。

さらに面白いのは、たいがいの市民運動というのは、企業に対しては「止める」なのです。原発を含めて。これとせっけん運動が一番違うところは、「止める」ではない、「私たちは使わない」ということです。これはすごく環境運動のはしりとしては、おもしろいです。

中村 そうですね。消費者の力は本当に大きいと思います。やはり最近の企業不祥事を見ていても、消費者が企業の商品を、ネグレクト（無視）してしまえば、業界からは商品は消え去ってしまいます。消費者の力はすごいなと思います。

大谷 だから僕はね、せっけん工業会は慌てたと思う。「こんな物作るな」というのだったら、こちら側も言い分がありますよ。こちら側はこういう対応をしますよ。ところが、使わないと条例で

決められてしまうと、なかなか「使え」とは言えないわけですね。買っていたたくわけだから。それが最大の慌てた理由ではないかと思うのです。

原発を止めるとかいう運動と違って、説明して立地条件を出して、補償をして、納得してもらって、それで建てる。ところが「買わない」という人たちに対しては、なす術がないはずなんです。そういう意味で同じ環境運動だと市民運動だとか言っている、これは何かをしないという運動の強さだと思つたのです。

つまり、環境に一番敏感な人たちが動き出した。赤ちゃんを持っている家庭はこれから子育てをしながらはいけない。その人たちが運動の中核になる。

せっけん運動がもたらしたもの 世代を越える土壌

大谷 あの時せっけん工業会が言ったように、リンの濃度というのは、そんなめっちゃくちゃなものではなく、琵琶湖のリン汚染の1割ぐらいしか合成洗剤が影響してはいないはずだと。それから、ある意味でえん罪ではないかと、標的にされた。それに対して、まともになぶつかってしまい、逆に環境運動、水質問題を燃え上がらせる元になってしまった。

奥田 そうですね、今の私みたいに科学的に何かを調べていく立場から言うと、当時の比率的なものがいろいろな、試算の仕方自体にも多少の誤差を伴いますので、言い分はそれぞれ出てくる部分があります。

大谷 結局、せっけん業界なんかは、どんな品質改善していくわけですか。リンの少ない合成洗剤を作っていく、「ほれ見たことか」と。1980年代になって、なるほど、滋賀県の合成洗剤の使用量は大幅に減るのです。同時に合成洗剤といえども、リンの含有率を大幅に減らしていくわけですね。ところが工業会に言わせれば、「そのことで琵琶

湖の水質がよくなったか」。1980年代になって悪くなっているではないか。決して水質全体がよくなっていない。リンは減った。そのあと、いわゆる環境を研究している側からいうと、その運動の評価というのはどうなのでしょう。

伊藤 社会科学者の私は、今やっているところなので何とも、まだ評価という段階まで、そこまでちゃんと調べていないのですけれども、運動を支えた人々は多くは女性だった、そういう人たちの何かできるというか、とにかく何をしたいかわからない状態で、その「せっけん」という一つの運動ができたということで、いま現在この滋賀県でいろいろと行われている環境への取り組みの、大変意味のある環境運動の土壌ができた。

大谷 うん。それは例えば黒田さんところは、今でもお母さんが合成洗剤ではない、それから、あなたが自身もつと優しい洗剤、せっけんではないにしても、いわゆる合成洗剤の中でも非常に環境にいい物を使いたいと思つている。それは、あの運動がやはり根っこにあって、その成果というのは必ずしもあの運動が百パーセント正しいとか正しくないとかは別個にして、残したものであると思うのです。

黒田 はい。それは大きいと思います。やはり、私も子どもを生んで、洗濯をする時に考えます。なぜそういうことを考えるかというところ、やはり母がそういうことをしていたからで、それを受け継いできているというの、私が今やっている環境に悪そうなものはないと使わないとか、そういうことに関してはその影響というのは大きいと思います。

畑 先ほどの、僕の住んでいる草津市は、もう早い段階から分別ゴミ収集もしてしまっていて、それを市民がすべてオーケーをしている。この週末に「こども環境会議」が草津市であるのです。そこに出ている子どもたちに「家で分別している人」と言ったら、全員手を挙げるのです。小学校自体でも取り組みとしてすべてやっています。そういうのは黒田さんが言った自分の親がやっていることで、



すごく入り込みやすいと思うので、30年前に起こった、その時に活動した人たちがもう今おばあちゃんになってきていると思うのですけれども、その孫たちが「おばあちゃんをやっているから」「おばあちゃんとお母さんがやっているから」というので、これは続いているのだなと。

大谷 それと、合成洗剤がたしかにターゲットにされた。そのうち、その工業会がリンの含有量を減らした。それから、琵琶湖の水質はよくなっていないではないかという、何かこちらはいちやもんつけられたみただけでも、そうではないと思うのです。

そう言われれば、あの運動をした人たちは、ほかでもっと悪いものがあるのではないかと、一生懸命探し出すと思うのです。「そうか、それで終わりだ」というのではなくて、「待ってくれ」と。「それを減らしても水質がよくなるから、今度は

何をしよう」と。「ほかにも犯人がいるかもしれない」と。

「勝手にそんなこと言うけど、実はあんたたちが垂れ流しているビールだとか牛乳だとか、そういうのがこんなのはせつけんより恐いんだよ。あつちのほうがよくて富栄養化につながっているんだよ」と、当然反論して出てきます。「おお、そうか」となるでしょう。何もなかったら、自分たちが垂れ流しているビールだとか米のとき汁だとか牛乳だとか、実は合成洗剤どころか、それ以上に汚れている。そういう企業と市民の緊張関係というのは、私はこの場合非常によかったのではないかと思う。

中村 一方的に、企業にだけではなくて、消費者自身も何か悪いところは直していくという運動は、なかなか、過去の運動でもないと思います。どちらかと言えば、だいたい企業が攻撃されるだけで、それで結果的に企業も改善策を何らか取っていると思うのですけれども、消費者としては自分たちは被害者だという意識だけで、悪く言えばけしかけているような運動もあると思います。そういう意味では本当にお互いにとって良い結果になったのではないかと思います。

大谷 そうですね。となれば、向こうが作戦を間違えた。工業会が乗っかってしまったから、今ごろになって四つに組みすぎたかなとか。特に言い合いになれば、お互いに欠点というのは出てくるのではないですか。片一方が「ごめんなさい」というのでは、お互いに欠点は出てこない。

せつけん運動の評価

琵琶湖あるがゆえ

大谷 私の関わり合った中で、滋賀県というのはやはり環境問題に関しては、日本で有数の先進県だと思つたのです。これはせつけん運動が根っこにあるでしょうし、もつと言えはやはり大きなこゝろ「琵琶湖」というものがある。「抱きしめて B I W A K O」

なんてのもある。あれは皆さんは行ったのかな。

黒田 私は行っていません。

畑 行きました。親と手をつないだみたいなきがします。

大谷 まあ、ばかでないことを考えたもので。グ

ルツとあれしたら二百何十キロあるのでしょ。

畑 はい230キロくらいあります。

大谷 あの運動そのものが、せつけん運動と一緒に後々いろいろと評価が変わってくるわけですけども、少なくともそういう何か、滋賀県にはそういう、三段話ではないけれども、琵琶湖があります、環境があります。琵琶湖ももう少し自然に対して優しくなりましょう。もう一つ進んで人に対しても優しくなりましょう。では障害者のためにも……。

奥田 この頃思うのが科学的ではないことをよく思うのです。というのが、環境というのは本当に漠然としたものでわかりにくいものなのですけれども、この滋賀県の人に話をすると、琵琶湖というもので明確に意識ができています。意識できているということが、つまり一番よく見ているのかなと。

私たちは、琵琶湖の水質の調査とかやって、科学的な分析は細かいことやっていますけれども、皆さんは感覚的なもの、何かちょっと違うとか、何かよくないのではないかとというような感覚的なところから見ている。そういうことはもう滋賀県の特徴ではないかと思えます。

大谷 やはり、琵琶湖をどうしようかという話になつてくると、やはり善きにつけ悪しきにつけ、琵琶湖という部分が突き動かしている。せつけん運動だつて、琵琶湖というものがなければ生誕してこなかったのです。琵琶湖が突き動かして、先ほどの「抱きしめて B I W A K O」ではないけれども、「何で人の命、障害者までいくんだよ」みたいな、そこが私はマザーレイクの語源だと思つたのです。いろいろなものを生み出すからこそ、そういうことでしょう。畑さんそう考えない？

畑 わたしは常に水辺に住んでいるのです。最初

の話に戻ってしまいますけれども、小学生の頃泳いでいました。たぶんその運動が始まった時、一番汚かったのです、この南湖。それでしばらく泳がなくなつて。ところがここ最近はどうもデータでも出ていると思うのですけれども、南湖はきれいになっていきますよ。

奥田 だいぶ改善されています。

大谷 透明度が上がっていますね。

これは実際、子どもらに乗せて透明度の検査しているの、びつくりするぐらい。前に大発生している藻もきれいに見えます。その水辺で直接している人のほうが、案外そう、きれいになつたからもういいん違つ、みたいな。こわいですね。

大谷 中村さんの銀行といつたら、金融機関と環境とは縁がなさそうですね。

中村 金融機関というのは、ある意味、市民団体と同じくらい社会を変える力があるというふうには、私は常々思っているのです。

核開発をするような機械を作っているところにはお金を貸しませんよと、そのぐらいの牽制力というのが金融機関にはあると思うのです。

大谷 それは、人間は金貸さないと言われたら……。(笑)一番こたえる。銀行は「もう金預けない」と言われるのが一番困るしね。

中村 そうですね。私たちに預けていただいたお金がどういふところに使われているかということ、きちんとかリアにしていくのも、コーポレート・ソーシャル・レスポンスビリティ(CSR) Corporate Social Responsibility) 企業の社会的責任ではないかというふうにも思います。

大谷 黒田さんは1970年代に琵琶湖に来られて、さつき畑さんがもう琵琶湖の南湖に入つたら汚かつた。そこまで汚れた時期があつたと。そこがその時期だつたと思うのだけれども、そこからだんだん琵琶湖がきれいになってくる。

一番大事なことはやはり、大阪も含めてそんなのですけれども、「きれいになつたからいいじゃん」「もう琵琶湖の水飲めるんだ」と、「改善されたんだ」と。それは逆に、案外水辺に住んでいる人たちが無感覚というか、「もういいよ」みたいな。そこはやはりこの運動の将来の展望があるとすれば、例えば今その合成洗剤、「やはり私は使わない」「少なくとも使うにしても、環境に優しい物を使いたい」。まさに琵琶湖を本流にして、それが全国に伝わっていかないと、運動というのは展望につながつてこないと思うのですね。

黒田 なので、そういうふうな世代にちゃんと意識を植え付けていかないといけないというか、植え付けていける結果を出せたいところではよかつたと思います。やはり、環境問題に関しては特になさなくても、問題がひどくならないうちに何とかしなくてはと考える人間がそれによつてできなくなるのではないかなというのがありますので、ちよつと琵琶湖から離れた大阪ですけれども、そういう飲み水がきれいになつてよかつたというのと同時に、やはりそれは私たちができることで守つていって、間接的ではありますけれども、そういう意識は持つていきたいと思えます。

外(未来)に向かつて

大谷 それでは、最後のテーマになるうかと思えますが、いま皆さん、それぞれがどう認識していたのか、それから、どう評価するのか。それからこの運動は今ではどういふ展望があるのかということでお話しいただきたいと思えます。

いみじくもいま黒田さんのほうから手前で止めようという話がありました。このせっけん運動の残した一つの教訓というのは、私はある意味では、手前で止めた部分と手前で止まらなかつた部分、つまり1970年代にあそこまで汚してしまつた。でもその一方で、合成洗剤が汚染の主役になる前に、いち早く止めにかかつた。しかもそれは、出荷している側が「これは大変なことになる」という、いわゆる欠陥商品だとか、あるいは食品のBSEの問題だとかというのではなくて、受ける側が大変だということを受け止めた。これはす

ごく意味があつたと思う。

いろいろ説があるのですけれども、世界で有数の古代湖である琵琶湖は、おそらく400〜500万年前にできている。しかし琵琶湖が本当にひどくなつたというのはこの50年なのです。高度成長に入る昭和30年代。500万年からすると50年というのは10万分の1なのです、琵琶湖の長い人生で考えると。10万分の1で壊滅的打撃を受けたわけですね。

いちばん大事なことは、その壊滅的打撃を与えた時期に我々はいたわけですね。その10万分の1の憎たらしいやつなのです。恨み骨髄なのです。せっけん運動というのは、やはりある意味では10万分の1の憎たらしいやつが、少しばかり、ほんの少しばかり贖罪をしたというに過ぎなかつたような気がするわけですね。

最初に、「我が内なる琵琶湖」を伺つた。では、これから自分たちは、琵琶湖と共に生きた世代として、我が外なる琵琶湖、外に向けて何ができるのかというのを締めくくりにお一方ずつお伺いして締めくくりたい。

奥田 はい。せっけん運動というテーマで話を始めていくわけなのですけれども、実はその当時と今とで、琵琶湖と我々の生活の関わりとの関係というか、それはさほど大きくは変わっていないのです。我々が使つたものが外に流れて、それが滋賀県の場合は琵琶湖に流れ込むという、同じスタイルが続いています。

あの当時、せっけん運動の一つ大きな運動にエネルギーを与えたことに、淡水赤潮という琵琶湖で発生した非常に衝撃的な事実があります。いま、赤潮はまだ依然として発生は続いておりますけれども、現在、我々が生活の中から環境に関わりのある化学物質といったものは、そのほかにたくさんあります。

それを、今の私の立場でいきますと、赤潮というふうな事実ではなくて、その手前の段階で今どういふ状態にあるかということをお我々自身が感じて、見て、知つて、そして自分たちの生活をまた

振り返る、こういったところに今、私の立場であれば調査研究という中で一つ皆さんに考えてもらえる、そういうような情報を見つけていきたいなというふうに思っています。

畑 取り組みかたちとしては違うのですけれども、琵琶湖をもっときれいにして、環境をよくしたいと思って活動しているの、今やっている活動は自分たちが思いつくことをまず始めているので、子どもたちと一緒にやっています。

そこに協力してもらえるところ、まず行政、次が学校現場。これがみんな独立しているのと個々には頑張っておられるのですけれども、連携してきていないところが多いのです。そこを、うちみたいな民間というか、NPO的な団体がつなくと。あともう一つ来て欲しいのが企業さんです。

大谷 そうですね。協力してくれないところには、お金を貸さないというわけにもいかないし。(笑)

畑 いま企業さんが参加しないところで、農業体験というのがいま市役所の協力も得て、学校と一緒に地元のおじさんたちに来てもらって、リンの問題で言うと、現在の琵琶湖に流入しているリンの原因が一番大きいのは田んぼではないだろうか。

大谷 そうですね。リンの場合は、かなり農業用水の可能性が高いのです。

(注)「滋賀の環境2005」によるとリンの汚濁負荷量の割合は、家庭系38・6%、工業系22・1%、農業系14・7%

黒田 子どもたちに「この水は琵琶湖から来ているんだよ」ということも教えて、こういう活動が琵琶湖でなされているのだということも伝えたら、やはりそうしたら今度、子どもたちも自分の直接の環境をどう守るかということまで考えられるのではないかと思えますので、そういった意味でも次世代につなげていくということが大事なことだと思います。

中村 もっと、金融機関として環境問題を変えていくために何ができるのか、環境を良くするようなお金の使い方というのを、子どもたちに教えて

いきたいです。お客様にも環境に取り組む銀行を応援して欲しいと呼びかけていきたいと思えます。逆に私たちも環境に取り組むお客様を応援していきます。

またもっと滋賀県が先進県となって、こういう運動を全国にもっと広げていけばよいと思います。さもなければ地球の未来はない。また逆に、今ならばじめれば間に合うというふうに思っております。まず、身近なところで、出来ることを一生懸命に取り組みます。

大谷 さて、将来若い世代として環境に関わっていく。でも、30年前には、実はお母さんたちの世代にこういう運動があった。この頃にまさに画期的なことだっただろうし、小さな市民から始まったのに、県条例まで作り出す。その県条例に実は日本の財界というか産業界というか、工業界というか、まともにぶつからなければいけないような運動だった。

その間にどれだけ環境問題が進んだのだろうか。別にして、では、これからどういうことを、つまり畑さんがおっしゃった次の世代にやることも、もういつばいできているのではないか。

伊藤 ちよつと趣旨から結構離れると思うのですけれども、どんなに私が環境に対して配慮してやったとしても、もう50年60年ぐら前に滋賀県で味わえた自然からの恩恵は、決して私の世代では返ってこない。行動をしたとしても、何もできない、何も変わらないのではないかというのが、今の世代の何となく共通認識なのではないかと思うところがあるのです。

こんなに頑張っていて、例えば車に乗らない生活をしたりしても、それは自分の利便性が排除されるだけであって、自分たちがいい環境を自分たちの世代で得られるという確信はまったくない。でも、先ほど中村さんがおっしゃったように、今ならまだ間に合う。私が生きている間には味わえないとしても、後の後の後の世代にとってみれば「やはりあそこで何かしていなかったら、私たちは得られなかっただろうね」という環境が得られる世代

特別寄稿

石けん運動を

振り返る

林 美津子

今でこそ、多くのNPOが色々な分野で活動しておりますが、かつて住民運動不毛の地とまで云われていた滋賀県で、主として女性達によって後々まで残る大きな成果を挙げた石けん運動こそ、滋賀県における初めての住民運動といってもよいのではないのでしょうか。

昭和40年代の後半頃から、東京の多摩川で川面から合洗(合成洗剤)の泡が風に舞う映像がテレビに映され、滋賀県でも瀬田川などで同様の光景が見られるようになりました。当時主婦湿疹やおむつかぶれ等の皮膚障害も多発し、環境面、健康面の両方から合洗の問題がやかましく取り上げられるようになりました。

時折、紙面でその2文字を見ても、それは瀬戸内海のことと、全く意にとめなかった。赤潮。それが思いもよらずびわ湖に発生したのです。それを契機にびわ湖の水質の問題として、石けん運動が一気に盛り上がりました。

合洗を追放するためには何とかして行政の力で条例を...という県民の強い声に押されて遂に行政も動きました。

私達は条例施行を前に、石けんアドバイザーとして毎夜のように町内を回りまわした。石けん用、合洗用の2台の洗濯機と合洗の害を訴えるビデオ等を持ち、地区の集会所で洗濯の実演と話し合いを重ねました。集まった人々も熱心に耳を傾け、覗き込むように実演を見て下さいました。今はびわ湖の汚染の原因は複雑多様化し、

がくるかもしれない。それを本当にかすかな望みとしてやるしかないのかなど。

そのせっけん運動の時は、たぶん、その洗剤を使わなければ確実に琵琶湖はきれいになると信じて運動がヒートアップしたというところもかなりあって、当時の運動していた人たちにとっても、「これをやれば必ずきれいになる」という、すごく確固たる確信があったからすごい力になった。

でも、私たちはできることをやることによる確信を得る、そのところからまず始めて、次世代につないで来てもらっていることを、継続してやることがとても必要なのだなと思いました、今日聞いていて。

奥田 途中で出たリンの排出ですけれども、一応県のほうで試算している中で、実際の生活から出ているのはまだかなり高いというのがあります。ただ、農業についても、実は滋賀県の農業の特性もあるかもしれないけれども、田んぼの代掻きをやっているときにはかなり出ているというふうにも思われます。

そういったことに対して、滋賀県で「環境こだわり農業」というようなかたちで、環境に考慮して、今の技術での利便性の高い作り方よりも、ちょっと不便だけれども、農薬の使用量を半分にしようとか、そういったリンだけではないのですけれども、そういったところで、物を作ることで自体にもそういったことを教えていこうというふうな取り組み、これも広がってきています。

この根底は、たぶんそういうせっけん運動から始まって、みんなで何かをしたい。誰かにやってもらおうのではなく、みんなで何かをしなればというふうな思いがたぶん根底にはあると思います。

それと、今のこの琵琶湖で環境の仕事させてもらって思うのは、私たち、今も伊藤さんが言われたように、いま我々がやっているとどういうふうにそれが効果になるかわからないですけれども、「なぜ滋賀県がやらなくてはいけないんだ」ではなくて、「滋賀県がやらなくて、ほかは誰がやるんだ」というものが、特に琵琶湖を中心にした地理的な特性、

それとこれまでせっけん運動でみんなで共感を共有していたあの感覚、こういったものがある。ここでやらなかったら、では世界中、日本だけではなく世界を含めてどこでやるのだと。

大谷 イラクで人質になった高遠さんの話ですが、みんなから散々バッシングされた。彼女は今イラクには入れないのでヨルダンからイラクの子どもたちを支援しているそうです。テレビの取材で私は「イラクで、遠くのヨルダンから子どもたち10人が15人支援したって何になるんだ」と聞いたのです。彼女がしばらく考えて言ったのは、たった一言、「微力と無力は違う」と。これに尽きる。

まさに私はそうだなと思ったのです。環境問題というのは、微力を寄せ集めていけば、決して無力ではない。これはある意味、せっけん運動の原点だったような気がするのです。最初、子どもを持つているお母さんとか、当時はまだ洗濯といえば女性のもっぱらの仕事だった。あまり社会に、まだ当時としては出てこない女性たちが、自分たちの生活の中で一番身近なところで、そのせっけんという非常に小さな単位、大型船の海洋汚染みたいなものではないところから始めた。微力が全部寄せ集まればそれは無力ではない。まさに環境問題の原点みたいなものです。

だから「私一人がやっただけじゃない」となると言わないで、頑張ってください。ありがとうございます。

全員 ありがとうございます。

たとえ全国のマスコミを騒がす運動や何十万という人が一同に会する運動を起こすことではないにしても、かつてのせっけん運動など琵琶湖を中心とした環境運動の魂は、滋賀県だけに止まらず第2第3世代に広く深く静かに受け継がれていっているようです。その魂が新たな時代にどういったかたちで現れてくるか、たいへん注目されます。

単にチツソ、リンを抑制するのみでは解決されなくなってしまう。地球規模の環境汚染が、そのまま琵琶湖の問題と云える時代になって、私達にもそれなりの学習の必要が求められると思います。

石けん運動こそが、私達の環境学習の原点であったという誇りを持ちながら、美しいびわ湖、くらしやすい環境を守るためにより一層地道な学習と実践を重ねて行きたいと思っております。

